

酒井邦嘉著 『デジタル脳クラ  
イシス——AI時代をどう生  
きるか』(朝日新書)

池上眞平

講演や授業を担当した際の私  
の工夫

私は、企業リタイア後に社  
会人対象の講演や出前授業を  
行っている。その際、左記の  
ことが気になり私なりの工夫  
を試みた。

・講演の際、パソコンに講演  
内容をインプットしている人  
から質問が殆ど出ない。質問  
が出た場合でも、それが陳腐  
である。時折メモをとりなが  
ら講演を視聴する人からの質  
問は、鋭い傾向がある。

これに対して「質問開始の  
前に講演後のグループ討論」  
を試みたが、顕著な効果は無  
かった。キーボード入力に注  
力した人の講演内容の咀嚼不

足が、この試みの失敗の原因  
ではないかと私は感じた。

・高校での出前授業の際、感  
想／行動計画／質問内容の質  
／量において、キーボード入  
力より肉筆が明確に優れてい  
ることに気付いた。そこで生  
徒達に、感想／行動計画／質  
問を肉筆で書く時間を確保す  
ることを試みたところ反応が  
良いので、これを継続してい  
る。その際、「肉筆による考  
察は、算数の筆算<sup>①</sup>として<sup>②</sup>脳  
内での考察は、算数の暗算<sup>③</sup>  
に対応する」「肉筆による考  
察力醸成が、脳内での考察力  
醸成に繋がる」という二つの  
コメントを必ず添えている。

英語公用語のプロジェクトで  
気になっていた事を踏まえた  
工夫

「英語が公用語の新写真シ  
ステム共同開発」に参加した  
直後は戸惑いの連続だった。

会議中の肉筆やキーボードによる英語のメモ書きは私には不可能だったので、英語の資料にマークやキーワードを肉筆で書くことを試みた。この工夫によって、意見交換と意思決定に積極的に参加することが出来た。ちなみに、英語ネイティブのメンバー達からのコメント「あなたの速い反応および的確な質問と意見は、素晴らしい」、ドイツ語ネイティブのメンバー達からのコメント「あなたの適切な内容明確化のための質問とコメントは、ありがたい」が印象に残った。

会議の議事録作成を務めた際にも、その工夫が役立った。英語やドイツ語ネイティブのメンバー達の「あなたの正確かつ簡潔な議事録は、素晴らしい」というコメントも印象に残っている。

本書『デジタル脳クライシ

ス』の帯文にあるキャッチコピー“ペンはキーボードより強し”に強く惹かれたのは、これらの経験のお陰ではないかと思われる。

### 本書の要旨

脳科学の専門家である「著者の経験およびその他の事実に対する脳科学に基づく批判的思考の実践」が、本書の最大の特徴である。

著者による警鐘「スマホやAIの普及により、日本人が脳の知的機能を使えなくなる」を示唆するキャッチコピーは、「一億総無脳化」である（注：低俗なテレビ番組により、日本人の想像力や思考力が低下することを示唆するキャッチコピーが、「一億総白痴化」だった）。

「キーボード入力の際、考察を踏まえた情報咀嚼が疎かになる“および”IT検索

による検索結果をモニターで読む場合、行間を読むプロセスなしで考察する“が、“一億総無脳化”に繋がる”ということが、著者の主張である。

左記が脳科学に照らした、著者が提唱する根拠である。

・脳内での情報内容の吟味や編集および記憶の定着や理解度において、肉筆がキーボード入力より優る。

・肉筆を軽視するGIGA構想に基づく日本の学校教育の左記の弊害を看過できない。

＊脳内情報処理能力醸成を

阻害

＊創造力醸成を阻害

＊能動的好奇心醸成を阻害

・脳のマルチタスク活用を阻害（脳の複数の機能の同時稼働）

（注1：脳の複数の機能の同時活用は、人間の強みの一つである）

（注2：”キーボード入力へ

の集中“が、脳の他の機能の稼働を停止させる）

著者は、「先生から生徒達への授業中のメッセージ」先生の話を聞く時には、聞くことに集中して“は、脳のマルチタスク活用を阻害する”との警鐘も発信している。

読後感

まず、私の気になっていた事と工夫が的外れでないと感じたのでほっとした。本書から「GIGA構想に基づくIT機器への依存が増す教育の弊害に対する改善策構築」および「その実践に繋がるヒント」を獲得できると考える。本書が、“教育者と保護者による左記の深刻な事態の改善に向けての行動開始に“本書が繋がることを期待したい。

・学校、部活そして学習塾で忙しい生徒達が、自由時間の

多くをスマホのゲームやSNSに費やしている。

・法規制のスピードが、AIを含むIT技術進歩のスピードより遥かに遅い。

・IT業界による主体的かつ抜本的なこの事態の改善の気配がない。

なお、「脳科学の立場からの著者の考察」と「精神科医師の立場からのA・ハンセンの考察」に対する批判的思考の結果を組み合わせること  
で、より良いヒント獲得を期待できるかな」と思う。（参照：アンデシュ・ハンセン著『スマホ脳』新潮新書）

生徒達の脳の多様な機能のバランス良い成長が大切であることが、両書共通の指摘である。また、「脳に対するダメージに基づく未成年の飲酒禁止は、生徒の健全な成長のためのIT機器とIT機器利用に対する何らかの規制必要

を示唆する」と感じた。

本書は、出前授業の更なる工夫を模索している私の背中を押して呉れた。

（元富士フイルム取締役・研究開発担当）